

2018年度外国語学部FD活動報告

(英米学科、スペイン・ラテンアメリカ学科、フランス学科、ドイツ学科、アジア学科)

外国語学部では、FD活動の取り組みとして、2018年度においても、FD研修会および学部自己点検・評価委員会懇談会を実施した。

FD研修会(7月27日)では、今後のCOILの活用を視野に入れて、「テレコラボレーションの実践と今後の展望」をテーマに掲げて、ノースジョージア大学講師の西尾知恵氏を講師に迎え、遠隔学習の事例紹介と今後のパートナーシップやプロジェクトのあり方についての予測・提言をしていただいた。参加者は28名であった。

学部自己点検・評価委員会懇談会(3月11日)では、各学科から2018年度のFD活動を含む自己点検・評価の報告と、意見交換を行った。

各学科のFD活動の詳細は、以下の通りである。

英米学科

【当初の計画】

- 1) 学科が管理するLL施設の有効利用ならびに今後の活用方法を検討する小委員会の検討を継続し、2019年度以降のLL施設の有効利用ならびに今後の活用方法についての方針を決定する。
- 2) 2017年度に初めて行った学科内ミニFDの回数を増やすことも含めて、学科内FD活動をさらに充実させる。
- 3) 長期の派遣留学生数の維持および更なる増加を図る方策の検討を継続する。
- 4) 2017年度と同様、学科内に専門の小委員会を組織し、学科必修科目の内容および評価の標準化の努力を継続する。

【報告】

- 1) LL施設の有効利用ならびに今後の活用方法について小委員会で検討された意見を学科会議で議論した。当初Academic English A受講者に限定していた英語力に問題を抱える学生のための支援活動を全英米学科生に拡大することを決定した。(第4回学科会議、第9回学科会議)

なお、LL施設の有効利用ならびに今後の活用方法については、将来的には、学科カリキュラムと有機的に結びついたセルフアクセスセンターに改修することも含めて、今後も議論を継続することとしている。(第5回学科会議、第18回学科会議、第19回学科会議、第20回学科会議、第21回学科会議、第22回学科会議)

- 2) 2018年度は、教職課程の再課程認定のための作業ならびにいずれも初めて行う海外フィールドワークA(ハワイ大学)、海外フィールドワークB(チチェスター大学)、オーラルインタープリテーションフェスティバルのための準備、運営に時間を取られ、残念ながら学

科内ミニFDを実施することはできなかった。しかしながら、年間を通して学科全体で対応した結果、教職課程の再課程認定、海外フィールドワーク、オーラルインタープリテーションフェスティバルのすべてで満足のいく結果を得ることができた。これらの経験は、学科構成員にとって様々な面で確実にスキルアップにつながっており、結果的に非常に有効なFD活動となっていたと考えている。

3) 海外留学強化については、様々な機会を通して留学の魅力ならびに有効性について強調した結果、例年並みの多くの派遣留学生を送ることができた。具体的には2018年度の英米学科派遣留学生数は、2018年春派遣が交換7名、認定4名、推薦1名の合計12名、2018年秋派遣が交換40名、認定5名、推薦0名の合計45名、2019年春派遣が交換7名、認定3名、推薦0名の合計10名、総計67名（2017年度は66名）であった。この他、休学して海外渡航した学生が27名おり、2018年度も100名近い学生が長期の海外渡航をしており、現状でも相当数の英米学科生が長期の留学／海外生活を経験している。今後は、海外フィールドワーク導入と長期派遣留学生数との関係についても分析していくこととする。

4) 学科必修科目の内容および評価の標準化の努力の継続については、コーディネーターを中心に努力を継続した。昨年度作成した必修学科英語科目であるAcademic English Aの独自テキストについては、今年度初めて使用した。現在は学科独自の共通テキストの作成も視野に入れてAcademic English Bの内容をさらに充実させることを検討している。

スペイン・ラテンアメリカ学科

- 1) 2018年度は、新たに2名の教員を学科に迎えたが、彼ら新任教員が様々な業務に問題なく適用できるよう、在職年数のより多い教員が教育・学科関連業務等の全般において相談に乗り、積極的かつ手厚い支援を行った。
- 2) 学科の必修スペイン語科目については、例年通り、学科内教務担当者とスペイン語教育コーディネーターが中心となり、非常勤講師を含むすべてのスペイン語科目担当教員との連携の下、カリキュラム・ツリーに従ってカリキュラム全体が有機的に進行するよう、年間の授業計画を策定した。また、スペイン語科目以外の学科科目についても、各科目担当者に対し、スムーズな授業運営ができるよう、疑問等がある場合、学科長および学科内教務担当者が適宜対応した。
- 3) 近年継続して教員交流を進めてきた輔仁大学（台湾）スペイン語学科より、本年も教員1名を招聘し、本学学生に対してスペイン語の慣用句に関する講演をスペイン語でおこなっていただくとともに、学科教員に対しても輔仁大学におけるスペイン語授業に関する意見交換の機会を持った。また、3月には本学科から1名の教員が輔仁大学からの招聘を受け、大学院生向け、学部学生（4年生）向け、学科教員向けに計3回の講演を行い、交流がさらに深まった。
- 4) 大学の世界展開力強化事業プログラム（LAP）を通じた上智大学との連携や、海外研究者による講演会の開催等は例年通り活発に行われ、学外機関との交流、情報交換、研究活

動の活性化が図られた。

- 5) 2017 年度に新規開講された 1 年次生対象の入門科目「スペイン・ラテンアメリカの文化 A/B」(学科教員によるオムニバス形式) は、2018 年度も同様の形式で行われ、コーディネーターを中心に教員間の事前調整および成績評価決定のための調整が綿密に行われた。
- 6) オープンキャンパスおよび国際センターのイベント「コロンビアウィーク」で、「スペイン・ラテンアメリカ学科教員によるラテンアメリカ音楽ミニライブ」を初めて敢行し、対象地域の文化の紹介と学科の情報宣伝活動のための新たな試みに挑戦した。

フランス学科

- 1) 2018 年度はクォーター制導入 2 年目に当たるため、学科内において定期的にミーティングを開催し、各専攻のカリキュラムに適した授業内容を配置するとともに、科目登録・授業運営等に問題がないか検証した。また、フランス語科目担当の非常勤教員を集めて教科書会議を開催し、授業方法について事前の打ち合わせを行った。
- 2) 履修ガイダンスや学び方講座の開催、オフィスアワーの設置、学科ウェブサイトの充実などを通じて学生の履修指導、留学支援、学習支援を行った。
- 3) 新カリキュラムの海外フィールドワークが 2018 年度より発足し、新たに加わったリヨンカトリック大学への研修旅行を行った。学科教員 1 名が同行したが、予定通り大過なく終了した。
- 4) フランス語教育促進のための学生によるフランス語劇は 12 月に上演を行った。フレンチポップ・コンクールは前年度に引き続き、共催者であるアリアンスフランセーズの事情もあり実施しなかった。また、東京日仏会館でのフランス語スピーチコンテストで学科学生が上位入賞を果たした。
- 5) フランス語教育の効果を測定し、その結果をさらに教育に活かすため、実用フランス語技能検定や TCF などの外部語学試験の団体受験を行った。
- 6) 学科の Facebook の更新、オープンキャンパスや高校へ出張授業などにおいて広報活動の活性化にも努めた。
- 7) フランス語圏に関する専門的知識を有する専門家を招いての学科主催による講演会は開催しなかった。

ドイツ学科

- 1) 2018 年、クォーター制は 2 年目を迎え、大学全体で「クォーター制に関する意見聴取」が行われた。それに伴い、学科でも議論が行われた。その中でメリット、デメリットなどが話し合われ、これからのカリキュラム編成に生かされることになった。
- 2) ドイツ語教育のクオリティーおよび教員の資質向上のため、主に外国語科目を担当する教員を中心として、定期的に授業の進捗などについて情報共有、意見交換を行うことで、

教員間の密接な連携を図った。その連携には学科専任教員だけでなく、外国語教育センター所属の教員も加わり、学生の学習状況の全体に目配りが届くよう努めた。

- 3) 近年のドイツ語圏の社会事情を教員自身が知るための機会として、外部から専門の講師を招いて講演会を開催した。NHK 解説員を講師にしたドイツを巡る国際情勢と安全保障についての講演がそれである。また、歴史学が専門のフランクフルト大学教授による「ドイツ人像」に関する講演は、教員自身に知的刺激を与えた。更に、ドイツ観光局日本支局長による「ドイツ観光事情」についての講演は、教員がイメージするドイツ像に少なからず影響を及ぼした。さらに、2018年度は2つの学科主催FDワークショップを開催した。ドイツの教科書出版編集者の「スマートフォンを使ったドイツ語授業」と、日本人研究者による「ドイツ語ダイアログの会話分析」についてのワークショップである。いずれも、参加した学科教員のドイツ語教育に関する知見を深めた。
- 4) これまで広報の観点からホームページを活用してきたが、その際、大学単位のホームページ、学部単位のホームページ、学科単位のホームページというように、三つの場にまたがって情報発信の場を持っていたため、情報が効果的に集約されないという問題があった。これに対し、学部、学科作成のサイトに情報を移転、統合し、情報発信の場を整理し、学科の新しいホームページの作成を始めた。新しいホームページは2019年7月下旬の開設を目指している。
- 5) 学生の勉学の支援、成果発表の場として本学科が他の教育機関等と連携して行っている一連の催しは、例年同様、2018年度も盛況を呈した。12月に開かれた、「南山大学ドイツ語弁論大会」では、本学の学生が1位、3位、「南山大学ドイツ語オーラル・インタープリテーション大会」では、1位、2位入賞するなど活躍した。学内に留まらず埼玉の駿河台大学で開催された「ドイツ語暗誦大会」でも本学科学生が1位、3位に入賞した。11月に行われた学生ドイツ語劇上演会（参加学生20名）も多くの来場者があり、盛況であった。加えて、京都女子大学主催「第7回ドイツ語俳句コンテスト」では、本学学科生が最優秀賞にあたる学長賞を受賞した。また、ヨーロッパ言語共通参照枠に準拠したドイツ語能力検定試験を「海外フィールドワーク」が行われたドイツ・デュッセルドルフで実施し、A2のテストに67名が合格した。また、秋に大学で開催されたB1の試験では6名の合格者があった。さらに、DAAD（ドイツ学術交流会）への奨学金応募に際して、昨年同様、学科として積極的にサポートを行い、1名の受給者を出した。

アジア学科

- 1) クォーター制導入に伴う新カリキュラムに配置した授業について、とりわけ外国語科目と演習科目について、前年度から継続して学科会議や担当者ミーティングの場でその運用状況を報告するとともに、評価できる点と改善すべき点について意見交換をおこなった。
- 2) 本年度Q2に実施した「海外フィールドワークA/B」について、学科会議の場で、それぞれ

れのプログラムの実施状況の報告、評価できる点と改善すべき点の検討をおこなった。

- 3) 学科教員間および学科教員と非常勤講師の間で連携をとって、授業における学生の様子を随時把握しながら、オフィスアワーを活用するなどして必要に応じて学生指導をおこなった。
- 4) 本年度リニューアルした学科作成ホームページに、幾つかの学科科目を紹介する欄を新設した。そこに掲載するために受講生に依頼した紹介文をもとに、当該科目に対する学生の評価を確認した。
- 5) インドネシア語スピーチコンテストを11月に開催した。本学科2年生が暗誦の部で第1位になるなど、インドネシア語教育の成果を示してくれた。
- 6) 国費留学希望者に対する留学説明会を中国・台湾、インドネシアそれぞれについて実施し、出願予定者に対しては研究計画作成等についての個別指導もおこなった。
- 7) 在学生の団体であるFA.comの協力を得ながら、新入生ガイダンス(4月)やオリエンテーション(5月)など新入生の活性化を目指す活動を従前通りおこなった。
- 8) キャリア教育の一環として、1年生を対象とする学び方講座を5月に実施した。

以上